

3月12日

主教教会博士グレゴリー

Gregorius I

(540頃～604.3.12)

～中世ヨーロッパ教会の父～

<人名事典などでの別表記：グレゴリウス>

グレゴリーには、教皇レオ1世と共に「大教皇」という称号が与えられています。また「大グレゴリウス」と呼ばれるのも彼です。

彼はローマの元老院議員の家に生まれます。父はローマ市の長官から修道士になりましたし、母と叔母も聖人となった人物です。

グレゴリーは教皇ペラギウス2世のもと助祭となり、コンスタンティノポリスへ教皇特使として赴きます。またビザンティウムで大使となります。しかし彼は、ベネディクト会の修道士にもなり、自宅を修道院に寄付したりもしました。

ペラギウス2世の死後、彼は教皇へと選出されますが、修道会出身の教皇は彼が初めてでした。教皇になった彼は、そのころ不安定だった西方教会を強化していきます。外的には、イタリアを席卷していたランゴバルト族の王を説得し、ローマを襲わない約束を取り付けました。また教会内部においては、「教会の土台はペトロの座を守るローマ教皇である」と首位権を力説し、自らを神の僕の僕と呼びました。

さらに内的には教会の規律を重んじ、当時おこなわれていた聖職の売買を禁止し、聖職者に対して修道をすすめていきます。また典



「第64代ローマ教皇
グレゴリウス1世」

在位:590～604

礼と聖歌の整備に取り組みますが、これがグレゴリウス典礼書やグレゴリオ聖歌の成立の契機となります。

さてグレゴリーは、ほかの民族をキリスト教化することに使命を感じ、ランゴバルド族やカトリックになったばかりのイスパニア、フランク王国などに多くの書簡を送り、宣教します。また、596年、アウグスティヌスと40人の修道士をアングロ・サクソン人のキリスト教化のためにイギリスに派遣します。彼はそのため、「イギリス教会の父」や、「中世ヨーロッパの父」と呼ばれます。

彼の800通にもわたる多くの書簡や毎日曜日の説教原稿、そして、「対話」、「道徳論」、「司牧規則」といった著作は、今も残されています。それらは中世のみならず、現在の教会に対しても大きな影響を与え続けています。

<特禱>

全能の神よ、あなたは主のしもべ、主教教会博士グレゴリーの教えによって公会を照らして下さいました。どうか天の恵みをもって公会をますます豊かにし、忠実な証びとを起して下さい。その生活と教えに倣い、わたしたちがすべての人に救いの真理を宣べ伝えることができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。
アーメン